6. 加茂の一農家　川西市史より

加茂の一農家の農事記録昭和９年から 40 年に及ぶ農家日記を紹介します。家族６人で水稲･野菜･桃･ぶどう･イチジク等を作り、日々の状況を克明に綴っています。「昭和９年６月６日、田を耕しその後自転車を 40 円で買い、西宮まで試乗、明日は神戸行きの予定とのこと」感心します。自転車を桃の出荷用として購入したようです。田耕は牛を利用し、肥料は、人糞を貰っている様子や、川西柳谷まで薪の収集に行っている当時の様子が記載されています。

現在と違い交通や運搬が不自由な中、日々、人力と知恵で働いておられる姿には感動します。

日華事変から、第２次世界大戦後の統制社会、食糧難、終戦後の農地改革や民主化、自由経済、機械化の流れが克明に記入されています。興味のある方は、拝読下さい。

川西市史 第６巻 P262

秋の風景

イチジク

イチジク

7. 加茂地域の農業と鴨神社

上加茂は台地に有りますが、下加茂には猪名川、最明寺川が流れ、肥沃な三角地帯となっています。四季折々、天候や自然現象の影響を受けつつも、弥生時代から、営々と農業が営われてきました。近年、下加茂地域は水が必要な田・イチジク等を作り、上加茂の畑では野菜や果物を作っています。農産物は、大阪・尼崎・神戸等近郊農業地域として出荷し、農家経済を支えてきました。加茂地域は大規模消費地に近い利点を活かし輸送が困難な生産物を生産してきた歴史があります。特に加茂の桃は昔から有名です。品種は早生桃を中心に生産しており、岡山や和歌山等から出荷される前には既に加茂の桃は出荷を終えています。阪急バス伊丹線が「桃源台線」と言われるのはその為です。昭和 40 年代頃は道路の左右が桃畑で覆われていました。周辺開発の影響で平成に入り減少傾向に有りますが、毎年アステホールで開催される桃の即売会では、直ぐに完売になります。

桃

桃

8. 鴨神社四季のお祭り

鴨神社の現本殿位置が弥生時代からの中心にあるとすれば、鴨神社の創始は弥生時代から地域集落の住民の安全や稲作の豊穣を願う祈りの場であったように思われます。

鴨神社では毎年、地域の安全・五穀豊穣を祈念し、「四季の祭典」を執り行っています。

「春まつり」祈年祭は春の万物の生育する時期、苗や種薪など田の仕事を開始する時期になります。祈年祭は２月 22 日に行います。

「夏まつり」豊作を妨げる害虫や台風等や疫病退散を願う式典です。７月 31 日には茅の輪を設け、「湯たて神楽」が行われます。昼過ぎから地域団体にて「夜店」が出店され境内は地域の子ども達で大変にぎわいます。

「秋まつり」は収穫に感謝する祭りです。10 月の第２日曜日は例大祭で３年に１度 「渡御」を行います。鴨神社のご神体を村の南側にある「御旅所」まで村中をご移動し、そこで神事が行われます。上加茂太鼓･下加茂太鼓、神輿　金餅持ち･お稚児行列･「浦安の舞」を踊る舞姫や猿田彦の巡行等、総勢 300 名近くが参加する加茂地域で古くからの行われています伝統の行事です。

「冬まつり」は 11 月 26 日に行います。秋の収穫を終え、始まりの春に備える式典です。この時期はこの１年に感謝し新穀をお供えし感謝する新嘗祭は全国で行われています。日本では１年を周期ととる考え方が多く年末、大晦日には１年間の御礼を込めた「お祓い式」が催行され、新年が始まると元旦祭を執り行い１年がスタートします。

因みに鴨神社で使用される「しめ縄・門松等」は毎年、宮総代（地域で選ばれた 10 人）が手作りで作る伝統を継承しています。

茅の輪

湯たて神楽

とんど祭り

渡御の様子

加茂小コミュニティ協議会 加茂遺跡クラブ
〒666-0025 川西市加茂3丁目13番23号 TEL 072-757-0210

市民環境部生涯学習課 協力

川西市文化財資料館 資料提供
〒666-0026
兵庫県川西市
南花屋敷2丁目13番10号
TEL 072-757-8624

「宮川石器館」
〒666-0025
兵庫県川西市加茂2丁目10番24号

参考文献「川西市史」
参考文献「加茂遺跡」岡野慶隆 著

加茂遺跡の出土品については「宮川石器館」に多数展示されています。来館希望の方は事前にご予約ください。

TEL 072-759-9077

入 館 料：無料
開館時間：10:00～16:00
休 館 日：日曜日、祝日、年末年始

※小学生のみのご来館はご遠慮ください。

加茂 歴史散策

第2巻

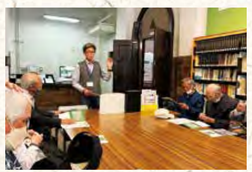
2024年3月発行

加茂歴史散策

1．加茂歴史散策 第２巻

「加茂歴史散策」第１巻では、加茂の台地が形成された経過、生み出された自然の営みとその結果もたらされた、台地の恵み、弥生文化についてふれました。

令和５年４月関西大学博物館で摂津加茂遺跡発掘 70 年展が開催されており、加茂遺跡クラブのメンバーで見学に行きました。関西大学末永教授を中心として、昭和 27 年から昭和 33 年まで 15 回にわたる体系的調査が行われ鴨神社周辺地を発掘して遺物、遺構を明らかにしました。遺物の種類は、石器・弥生土器須恵器・玉などがあり、出土量は弥生時代中期のものが最大ですが、石器等の分析から、太平洋側、日本海側からの石器もあり当時から何らかの交流があったと思われます。また集落内の居住地は遺跡東部を中心としつつも、西側にも広く延び、西部には方形周溝墓や木棺墓などからなる墓地が広がる集落構造で、居住集落と墓を分離させた文明的集落機能を確立していたことが分かってきました。



共同発掘調査の成果は昭和 43 年に「摂津加茂」としてまとめられています。

遺跡の存続時期は縄文時代後期・晩期・弥生時代・古墳・奈良・平安時代などの各時代の遺構・遺物が次々に検出される中で弥生時代中期が最盛期であることが分かっていますが、その後も近畿地方の中心に長期間に及ぶ集落地であることもわかってきました。

2．弥生時代中期、加茂遺跡大集落化

弥生時代中期に加茂に居住した人々は、台地である特徴を活かし斜面環濠等で村を防御しながら、近隣との争いや緊張関係の中で大規模集落として防御機能をいかした、重層性を持つ集落構造を生み出していったと思われます。

弥生時代の始まりは、歴史書では紀元前５～４世紀大陸から鉄器が日本に伝わった頃からスタートし２世紀後半、崇神天皇による大和の統一をもって終わりとされています。

その後、古墳時代に繋がるとされています。「弥生時代中期」はまさしく小国同士の争い（倭国内乱）の時代だと思われます。後漢書では、西暦 239 年、卑弥呼が邪馬台国の女王になったとされ『魏志』倭人伝では、魏の明帝が卑弥呼を「親魏倭王」とし金印紫綬を授与して銅鏡 100 枚を下賜したと書かれています。この銅鏡は、従属し忠誠を誓った地域の豪族や首長に配布されたと言われています。加茂遺跡の東側斜面より、当時神々へ信仰の象徴である銅鐸が出てきており、神事が行われていたことがわかります。２世紀後半には大和朝廷の統一により、倭国（日本）は平和で安定した時代を迎えることになります。その為、弥生時代後期には、加茂の大規模集落は縮小し居住区は近隣地域に拡散していきます。それは何より朝廷の治世と稲作農耕技術の進歩にともなう食料生産の増大や畿内の弥生社会の統合や安定化がもたらしたものであると思われます。倭国内乱と言われた弥生時代の中頃までの稲作農耕社会は、加茂遺跡のような防御機能を持った大規模集落が必要であったと思われます。

周辺の遺跡

弥生時代中期、加茂遺跡に近接し、栄根・小戸・下加茂遺跡等も発見されていますが、共存していたと考えられています。近接地域とも、墓跡のみの検出しかなく弥生中期の住居跡は発見されていない事から自然環境や防御の面から考えると加茂台地の遺跡内で居住し集落を形成していたものと思われています。大型建物には地域の首長が住んでいたのか、信仰の中心があったのかは定かではありませんが、一つの集落を形成していたのは間違いがありませんし、大きな集落として生きていける米を中心とした食料も備蓄していたと思われます

国の史跡指定の背景

平成 12 年に加茂遺跡が国の史跡に指定された要因は環濠の検出、大型建物と方形区画の発見が大きいと思います。大型建物は現在の鴨神社、本殿の裏に位置し、環濠に囲まれた遺跡東部の集落中心域の中央部にあります。さらに西部の南北二つの環濠外居住区、その西側に広がる墓地等、20 ヘクタールを超える近畿地方を代表する弥生中期大規模集落であり近畿文化圏の一翼として、国づくりの歩みの中で重要な位置をしめていたと思われるからです。

3．加茂遺跡の弥生時代後期

加茂遺跡は弥生時代後期になると集落が縮小し、遺構・遺物量が急に減少します。この時期より周辺の集落群で大きな変化が見られ栄根遺跡・小戸遺跡・下加茂遺跡・寺畑遺跡・久代遺跡等でも竪穴住居が検出されるようになります。これらの集落は元々加茂遺跡の縮小化と表裏一体のものであると考えられ、加茂遺跡は弥生集落を形成していた母体と併存していたものと思われます。

周辺地域の発展

加茂遺跡は、稲作農耕文化の発展により大規模集落は縮小したものの、縮小した東部居住区が残ります。加茂遺跡の優位性は失われますが、栄根・小戸等　近隣集落が充実するとともに、その後の歴史にて古墳（勝福寺古墳）や古代寺院（栄根寺廃寺）が築かれるなど加茂大規模集落を形成したと思われる地域社会は着実に継続発展していきます。

各時期の古墳や古代寺院の分布する地域は加茂遺跡を原点とする、小地域社会を形成する集落遺構群としてとらえる事もできます。川西南部地域は、古代律令国家が成立する奈良時代（８世紀）になると、地方支配・行政制度が整備され川西を含む猪名川右岸の一帯は「摂津国川辺郡」となります。さらにその下部組織として、「雄家郷」として栄えます。さほどの広さはないですが、完結した一つの古代における基礎的な小地域として考えられます。

4．二つの銅鐸

明治 44 年に発見された栄根銅鐸は高さ 114 センチ、鴨神社東側斜面より発見されました。加茂遺跡の弥生後期のものです。加茂遺跡の後期集落に直接関係するものと見られると思います。近くの銅鐸としては、もう一つ北方丘陵から高さ６３センチの満願寺銅鐸が出土しています。加茂遺跡から２キロに過ぎないことや、台地裾を流れる最明寺川の源流であることを考慮すると加茂遺跡に関係する銅鐸とみて間違いがないと思われています。治安の安定化にともない信仰面で必要であった、銅鐸文化からの脱却を意味し、いずれも居住地山裾に埋めたものと推察されます。現在、栄根銅鐸は東京国立博物館に満願寺銅鐸は大阪城天守閣に所蔵されています。

5.「からむし」の繊維

弥生時代，加茂の人たちはどのような服を身に着けていたのでしょうか。輪状式の弥生機で織れる布の大きさは、織る人の腰の幅と足の長さに合わせたものです。

「魏志倭人伝」に見える貫頭衣は２枚の布を並べて縫い合わせ、折り返してできます。丈はちょうど膝がでるくらいだったのでしょう。

「からむし」は一般的には聞きなれない植物ですが麻の一種で、夏場に刈り取ってその皮から繊維を取り出します。「イラクサ科」の多年草で成長すると 150 センチ程になります。

広く分布していますから、現在でも加茂地域の近所の堤防等いたる所に沢山生えています。

16 世紀以降国内で木綿栽培が盛んになり、広く木綿が着られるようになる以前は、「布」といえば「麻」（大麻・からむしなどをはじめとする麻の仲間の総称）のことを指し庶民には一般的な衣服の材料でした。

加茂遺跡クラブでは、クラブ行事として貫頭衣の作成にチャレンジしていますが、大変手間の係る作業です。一口に「からむしの繊維をとる」と言っても大変で、炎天下で刈り取り、表皮をはぎ、甘皮をそぐ作業、乾燥させ、その繊維を手で繋ぎ合わせ、糸車で撚りをかけて糸をつむぐ作業になり、それを織ることで貫頭衣に仕上げます。指先は荒れますし、面倒な作業が続きます。加茂コミュニティの「加茂まつり」や川西市の「加茂遺跡」スタンプラリー等でも展示しています。

からむしで織った布

「加茂人」の足跡

縄文土器

石皿

石鏃（せきぞく）（弥生時代）

石錐（いしきり）

石庖丁（いしぼうちょう）

旧石器時代 ≫ 縄文時代 ≫ 弥生時代 ≫ 古墳時代

約16,000年前

動物や魚を捕り、
木の実を採集していた。

ナイフ形石器

食べ物を土器で
煮て食べていた。

石鏃（せきぞく）（縄文時代）

紀元前3世紀

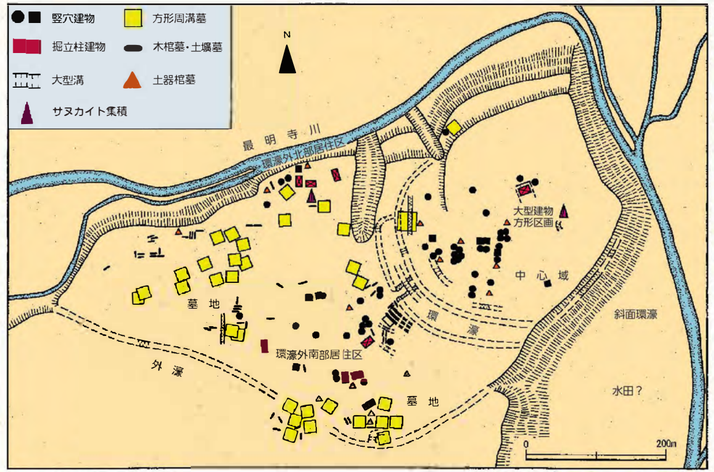
弥生土器

石斧

3世紀

銅鐸（高さ114cm）
この銅鐸は鴨神社東側斜面下部で1911年に発見され「栄根銅鐸」と言われています。現物は東京国立博物館で所蔵され同じ大きさのレプリカが川西市文化財資料館に展示されています。

※これらの石器類等は全て加茂遺跡から出土したものです。



加茂遺跡（弥生中期）地図

加茂遺跡は弥生時代中期が最盛期で約500人が生活していたと思われます。大きさは、東西800m、南北400mに楕円形で環壕に囲まれて居住区、墓地に分かれており、中央部の大型建物に行くには、西側の環濠入口の橋を渡って入っていたようです。

加茂小学校区コミュニティ推進協議会 加茂遺跡クラブ
〒666-0025 川西市加茂3丁目13番23号　TEL 072-757-0210
2021年3月発行

川西市教育委員会事務局
教育推進部社会教育課 協力
川西市文化財資料館 資料提供
〒666-0026
兵庫県川西市南花屋敷2丁目13番10号
TEL 072-757-8624
「宮川石器館」
〒666-0025
兵庫県川西市加茂2丁目10番24号
参考文献「川西市史」
参考文献「加茂遺跡」岡野慶隆 著

加茂遺跡の出土品については「宮川石器館」に多数展示されています。来館希望の方は事前にご予約ください。
※小学生のみのご来館はご遠慮ください。

TEL 072-759-9077

入 館 料：無料
開館時間：10:00～16:00
休 館 日：日曜日、祝日、年末年始

加茂 歴史散策

加茂歴史散策

加茂遺跡ってどこですか？

1.加茂台地

加茂台地は、伊丹台地の北東端にあたります。約10万年前頃は伊丹台地の一部分は海面下にあったといわれています。しかし今から3万年前、一旦北上した海で入江ができ粘土が堆積しました。その後、猪名川や武庫川のほか、長尾連山から流れる最明寺川、天神川などの土砂による自然の埋め立て作用で砂れきが海を埋め、隆起を繰り返した後、猪名川の侵蝕(しんしょく)により崖が形成されたのが加茂台地です。古くは旧石器時代のものですが、約2万年前に使用されたと思われるナイフ形石器が発見され、実物は加茂の村の中にある「宮川石器館」・「川西市文化財資料館」に展示・保存されています。恵まれた自然・生活環境の中で、加茂台地を舞台として様々な歴史が展開されてきました。

下から加茂台地を望む

2.加茂遺跡の発見の経過

①今から110年前(1911年)に加茂台地の山裾(やますそ)より大型銅鐸(どうたく)が畑の中から偶然発見されました。それまで加茂遺跡の存在は知られていませんでしたが、大正時代には鴨神社周辺の桃畑で多量の弥生土器、石器が発見されるようになりました。当時鴨神社周辺は殆ど桃畑であったようです。桃畑の草かりをしていると土器や石器のかけらが多く出てきたとの事。「チャリン」と独特の音がすると、それは「矢じり」で畑の表面にも出てきていたようです。

②行政も1960年代より調査に入り、旧石器・縄文時代から奈良・平安時代に至る集落跡や最盛期の弥生時代中期の集落が約20ヘクタールにも及ぶなど実体が明らかになりました。続いて1992年には、鴨神社北側で方形区画を伴った大型掘立柱建物跡の検出、1994年には斜面

加茂遺跡航空写真

環濠(かんごう)の検出等が相次ぎ、2000年には鴨神社周辺が重要地として国の史跡に指定されています。遺跡保存の為その後も追加指定されています。「弥生の集落」が徐々に明らかになってきています。

③当時の文書や書物は日本には残っていませんが、中国の古文書「漢書」「地理志」には倭国(日本)からの遣使を記し、倭国は百余国に分かれていると記されており、加茂台地の集落はその中の一つであった可能性があるとの説もあります。環濠等で守られた近畿地方を代表する大規模集落遺跡であり、大型掘立柱建物跡が発見された事からこの集落や集落の周辺地域のリーダー的存在となる首長の家があったのではと考えられます。邪馬台国よりおよそ200年も前に、もし川西一帯を治める首長がいたならば、当時の近畿地方がこれまで考えられていた以上に進んだ地域で邪馬台国が近畿にあった可能性も大きくなってきます。川西市はこれ以外に小戸遺跡や栄根遺跡も発見されており、まさに歴史ロマンを感じる所です。なお、遺跡の中心に位置する鴨神社の創建時期は明確ではありませんが、「延喜式(えんぎしき)」内社で平安時代以前から存在した神社とされ、古くから地域住民の安全や五穀豊穣を願う祈りの場所だったと思われます。御祭神は「賀茂別雷大神(かもわけいかづちおおかみ)」で京都上賀茂神社の御祭神と同じです。

加茂遺跡 斜面環濠

加茂遺跡 環濠入口

3.加茂にお城があった？

「信長公記」には1578年、荒木村重(むらしげ)の摂津国有岡城(伊丹)を攻めるために「賀茂岸砦(かもきしとりで)」(加茂城)が主に織田信忠の陣所として機能したと書かれています。

加茂から池田城を望む

戦国時代、当初は池田氏に仕官する荒木義村(よしむら)(村重の親)の守る城があったと言われています。池田氏は摂津国では有数の国人で、大阪府池田市の平山城「池田城」を構築していました。その対面にあるのが加茂台地で急にそりあがったジャンプ台の様な崖があり自然の要塞のようになっていました。戦国時代になると、よりその必要性が増したものと思われます。池田氏は加茂村を代官地とし接収し、館や集落を形成して池田城を守る西の砦として活用、代官地を守るとの大義で家臣を住まわせていたようです。

当時「加茂城」を任されていた義村は、信濃守を称して、池田六人衆の一人と記されています。後に摂津守となる荒木村重も元々は池田氏の家臣でした。時が経過し織田信長の家臣になった村重が信長に謀反(むほん)を起こし、伊丹にあった有岡城に立て篭もると、それを攻撃するため信長の嫡男「信忠」を進軍させ加茂城に入ったと記されているのです。信長は西国街道と古池田道で軍勢を進め両軍にて有岡城を孤立させたもので、高槻城・茨木城を落城させた後、池田城に入城し戦禍(せんか)を眺めていたようです。池田城は五月山の麓(ふもと)にあり、加茂城も有岡城も一望にする事が出来る所にあります。今でも阪神高速をまたぎ加茂台地から池田城がみえます。当時は通信手段として狼煙(のろし)、旗、鏡等で連絡をとりあっていたようです。加茂地域の中に旧加茂村字に「城屋敷」「城垣内」など

の小字(こあざ)がついていた時代があります。又、加茂地域は古くから有馬道(京伏見街道)・多田道・西国巡礼街道・池田道等交通の要所となってきました。村道が「古池田道」といわれる所以(ゆえん)です。今も右 小浜 三田　左 伊丹 西宮の道標が村の中に残っています。

古池田道　道標

4.加茂でお酒をつくっていた？

加茂台地は伊丹台地の北東端にあります。有馬山脈からの粘土質の強固な地質は井戸の素掘りも可能でした。地下水も出てきます。元々伊丹は清酒発祥地といわれますが加茂の地域内でも江戸時代は清酒の「つくり酒屋」がありました。江戸にも送られ人気があったようです。良いお酒をつくるには良い水が必要です。

加茂の村の中には今でも井戸を有している家が沢山あります。地下水が地表に出てくるのは加茂の「谷口」と言われる所です。そこには今でもヒメボタルの乱舞(5月～6月上旬)する姿が見られるようです。しかし宅地化の波もあり、年々減少傾向にあります。粘土質の強固な地質は隆起した小高い山となり古くから戦略的に利用されてきました。伊丹総監部周辺には国史跡「伊丹廃寺跡」が残っています。金堂や五重塔を有する法隆寺方式の伽藍(がらん)配置の立派な寺院が建設されていましたが、信長の有岡侵攻にて焼失したとされています。

街道図

5.加茂井って何ですか？

加茂井は1654年小戸「天王宮」を取水口として猪名川より田畑への灌水の為、新溝を掘ったものです。川西市と池田市との境は加茂井とされています。猪名川が境目ではないのですね。米作りのために水は絶対に必要なものでした。日照りの時等、この用水をめぐっては、何度も争いがあったことが記されています。今も水を放流する日、止める日は加茂井組(加茂・久代・北村で構成)で相談して決定、上流の田畑から田植えをし、下流に流していくルールは守られています。加茂の村人が新溝を掘った事により田畑用灌漑用水(かんがいようすい)として19ケ村が恩恵を受けたと言われています。代官所の取り決めで水をせき止める時の杭の打ち方、石の入れ方等も定められていたようです。当時の加茂の賢人が高低差を調整しながら、土木技術を駆使し伊丹の田畑までを潤す(うるお)灌漑用水を作り上げた技術に感心させられます。当時の代官所でも高く評価されていたようです。

加茂井が作られてから367年、今も沢山の田畑を潤しています。その時代の労苦に感謝し記念碑が建てられている場所があります。鴨神社にご参拝の際には是非ご覧ください。階段を登りきった右側に記念碑とともに、小戸神社の上流にあった夫婦桶、栄根にあった「7つ石」が保存されています。

鴨神社加茂井記念碑